慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョージ・ W・ シェファード著『アフリカ・ ナショナリズムの政治』
Sub Title	George W. Shepherd, Jr. : The politics of African nationalism
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1963
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.36, No.10 (1963. 10) ,p.108- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19631015-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

George W. Shepherd, Jr.:

The Politics of African Nationalism

Challenge to American Policy

F. A. Praeger, N. Y. 1962, (X+244 pp.)

ジョージ・W・シェファード著

『アフリカ・ナショナリズムの政治』

一　本書は、アフリカ・ナショナリズム発展の類型とその問題点に関して全般的な見解を提示するための一試論である。一般に、「アフリカの年」といわれた一九六〇年前後から、アフリカに関する文献の数はいちじるしい増加を示してきているが、それにもかかわらず、もつとも基本的な問題であるはずの「アフリカ・ナショナリズム」については、すぐれた研究業績はあまりだされていない。すなわち、アフリカ・ナショナリズムといえば、James S. Coleman; "Nationalism in Tropical Africa," The American Political Science Review, Vol. XLVIII No. 2, June 1954. および Thomas Hodgkin; Nationalism in Colonial Africa, 1956. を想起するにとどまるのが現状なのである。これ以外にすぐれたものを求めれば、前記コールマンの Nigeria: Background to Nationalism, 1958. ということになろうが、これはあくまでもナイジェリアだけをとりあげた特殊研究で

あるということを考慮しなければならないであろう。アフリカ研究のこうした現状だけから考えても、本書が十分存在理由をもちうることは明らかである。

著者シェファード博士は、現在デンヴァー大学に所属する政治学者であり、かつてウガンダにあるアフリカ農民協同連合会の技術顧問を二年間つとめた経験をもつている。したがつて、本書は「単なる紙のうえの研究」ではなく、学識と現地での体験がいつしよになつて生みだしたものとして注目されなくてはならない。

本書は二つの部分から構成されており、第一部ではアフリカ・ナショナリズムの類型化がおこなわれ、第二部では、第一部でえられた事実認識にもとづいてアメリカの対アフリカ政策の方向づけが試みられている。しかし主要なテーマはやはりアフリカ・ナショナリズムの類型化と、それをささえる著者の基本的認識方法であり、したがつて本稿においても主としてその点に関して興味ある部分を指摘しつつ、簡単な紹介と批判を試みたいと思う。

二　紹介にさきだつて本書の内容を目次で示しておくのが便利であろう。

序　論　アフリカ・ナショナリズムにおける政治文化的コンフリクト

第一部　アフリカ・ナショナリズムの類型

一、消滅に向う伝統主義的ナショナリズム

二、過渡期にたつ西欧化ナショナリズム

三、アルトラ・アフリカニズムの抬頭

四、南アフリカ――ホワイト・レイシャリズムの最後の抵抗

第二部　政策への挑戦

五、共産主義の影響力の増大

六、国連におけるアフリカ

七、アメリカによるアフリカ政策の起源

八、あたらしい政策のアプローチ

このほか、巻末に一五九件の文献が提示されている。

まず序論ではアフリカ・ナショナリズムに対する著者の基本的認識方法が提示されるが、ここで興味をひくのは、政治文化という概念を認識の土台として用いていることである。著者によれば、静的な状態にある非西欧世界の伝統的文化は、動的な西欧文化のインパクトをうけると、まず第一段階においてこれに抵抗し、第二段階においてこれに同化しようと試み、そして第三段階において過去の文化を再認識しつつ過去の文化の偉大さと近代主義のあたらしい力とを結合させようとする方向にむかう。こうした指摘はすでにA・トインビー、R・エマーソンその他によつてなされており、けつして著者のオリジナルな認識とはいえないが、この認識を土台とし、それを政治文化として「政治学化」したコールマン等の影響をうけつつ、前記第一段階を伝統主義的ナショナリズム、第二段階を西欧化ナショナリズム、第三段階をアルトラ・アフリカニズムとして類別したことは、大いに注目されてよいと思われる。もつともこの場合、個々のナショナリズムの内部にもこの三つの流れが存在し、それがおのおの一定の階級にささえられて政治文化的対立抗争をおこない、そのうちの支配的な流れがいずれであるかにしたがつてナシ

ョナリズム全体の類型が決定されるのである。このように著者がアフリカ・ナショナリズムの類型化を試みながらも同時に運動の複合性を十分認識していることは、重要であろう。

つぎに、第一部では、これらアフリカ・ナショナリズムの三類型、およびこれらの潮流に逆行する南部の白人レイシャリズムが、具体的にとりあげられる。伝統主義的ナショナリズムの具体例としては、モロッコ、エチオピアがあげられているが、著者は、国王の神権的権力とトライバル・システムがその社会の中核として機能している点でこの両国を一括しながらも、比較的開明された君主のもとで徐々に近代化の方向へすすんでいるモロッコの君主制を近代的君主制と称して、退行的なエチオピアの君主制と区別している。アフリカを吹きまくる近代化の嵐のなかにあってこれらの伝統主義的ナショナリズムがやがて力をうしなうであろうことは当然予想されるが、その場合西欧化ナショナリズムの方向へすすむことなく、伝統への誇りと近代主義の力とを結合したアルトラ・アフリカニズムへ転化する可能性をもつていることは、著者の指摘するとおりであろう。

第二の類型は西欧化ナショナリズムであるが、このタイプのナショナリズムは西欧的文化のインパクトによつて土着の伝統的文化が崩壊した、いわば一種の文化的真空状態に出現するのであり、西欧的思考様式を身につけたインテリゲンチャ、その他少数のミドル・クラスをその担手とする。西欧化ナショナリズムは現代のアフリカにおいてもつとも多くみられるパターンであるが、それらの国の政治文化および政治機構は、基本的にはそれにインパクトをあたえた西欧文化の型、いいかえれば旧植民地本国の文化の型を、そしてまたそれがあたえたインパクトの型をするどく反映している。かくて西欧化ナショナリズムはさらに、(1)イギリスの植民地支配を背景としてイギリス型の近代的諸制度をうちたてている旧英領西アフリカ諸国（ナイジェリアをその典型とする）、(2)イギリスの植民地支配のもとにあつてとくに白人入植者を中心とした少数人種の影響をつよくうけている旧英領東アフリカ諸国（たとえばタンガニーカ）、(3)フランス植民地支配の影響をつよくうけている旧仏領西アフリカ・赤道アフリカ（一例としてコートジボアールがあげられる）、そして(4)アメリカが解放奴隷を送つて建設したリベリア、に分類されているが、これらはいずれも西欧化された民族主義的政府をもち、おおむね旧植民地本国と緊密な文化的・経済的連帯を維持していることを特徴とする。しかし西欧的な民主主義的諸制度を導入していながらも、それらのほとんどすべてが実質的にただ一人の支配的人物によつて指導された一党制を採用している事実に対して、「実をともなわない形式だけの移植である」というありきたりの批判を加えたり、「後進性の証左である」という単純な断定をくだすにとどまつていたりすることは、誤りであろう。この点については、文化の多元性を認識すべきであるという著者の主張がもつと追求されてしかるべきであるように思われる。いずれにせよ、この西欧化ナショナリズムは急激な発展過程をたどつて、第三段階すなわちアルトラ・ナショナリズムの段階に移行するのであるが、著者はガーナとギニアの二つ

を具体例として引用しつつ、その特質を明らかにしている。その特質は再三くりかえしたとおり、数世紀にわたる西欧文化への従属をたちきりアフリカ文化の伝統とその本質を再確認することによつて、近代主義の力とそれとを結合させようとするところにあるのであり、またそれにもとづくアルトラ・アフリカニストの主要な政治的観念は、(1)アフリカの統合と、貿易・援助の相手国を多数化することによつて、ネオ・コロニアルな性格をもつ西欧から経済的・文化的に独立すること、(2)所有・生産・分配の共同化によつて急速な経済成長をもたらすような国家計画をつくりあげること、(3)大衆的基盤に立脚した一党制の樹立、(4)アフリカ人がもつ偉大な過去の文化的・人種的遺産を強調するためのパン・アフリカ的観念を育成し、植民地時代の所産である国家間の境界をパン・アフリカ運動によつて取りのぞくこと、の四点に要約されるのである。こうした観念はむろん西欧化ナショナリストも分ちもつているが、それはあくまでも部分的にもつているのであり、またアルトラ・アフリカニストにみられるほど徹底したものではない。著者によれば、アルトラ・アフリカニストは独自の階級的基盤をもつており、またそれ自身のイデオロギー的オリエンテーションをそなえている。すなわちアルトラ・アフリカニストは、西欧化の段階でひくいステータスに甘んじ政治権力から完全疎外されていたミドルクラス下層部、労働者、農民、軍人等をその権力の基盤にもつており、また、かれらを方向づけているのは、「ヨーロッパ的なもの」ではなく「アフリカ的なもの」なのである。アルトラ・アフリカニストは民族革命の初期的段階においては西欧化ナショナリストと協調するであろうが、やがてかれらをネオ・コロニアリストの協力者として排撃するにいたる。しかし、かれらがマルクス主義的ターミノロジーを用い、コミュニストのテクニックを使用するからといつて、これを共産主義者とみるのは誤りである。このことは、かれらがソ連を一種の帝国主義とみ、また権力を掌握するや共産党を非合法化している事実によつても明らかであろう。

おおむね以上のような認識を土台として、著者は第二部でアメリカによる対アフリカ政策の方向づけを試みているのであるが、ここでは省略する。

三　以上において、本書の興味ある部分の紹介を多少の批判をまじえつつ終えたつもりである。いささか恣意的な紹介の仕方ではあつたが、問題点はおおむねひろいえたであろう。総合的にいつて、本書のなかで提示された認識方法、類別方法は大いに示唆的であり、アフリカ・ナショナリズム研究の水準を一段たかめるうえに十分やくだちうると思われる。とくに現代アフリカの変化過程は政治的な対立・抗争を軸としてすすんでいるのではなく、文化的なコンフリクトを中核としてすすんでいる、という指摘は、アフリカ・ナショナリズム研究に一つの方向づけをあたえうるほどのつよい影響力をもつているといえるであろう。ただ、著者の認識とそこに引用されている個々の事実がすべて有機的に結びつけられているわけではなく、したがつてあたらしい認識にもとづいたあたらしい解釈がかならずしもでていなかつた部分も散見せられたことは、いささか

物たりなく感じられる。しかし、そうした欠陥も前述のような長所をいささかも割りびくものではないであろう。

（小田英郎）